

新潮文庫

夢 幻 の な か

立 原 正 秋 著



新 潮 社

なかの夢幻^{むげん}



定価280円

新潮文庫 草 95 - 13

昭和五十七年二月十五日
昭和五十七年二月十五日
発行

著者
立原正秋^{たちばな まさあき}

発行者
佐藤亮一^{さとう りやういち}

発行所
株式会社 新潮社

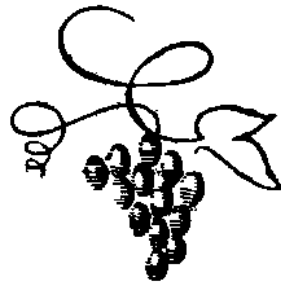
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

夢 幻 の な か

立原正秋 著



新潮社 版

目 次

I

わが風景の構図

春の雪のなかを	三
山桜のなかを	二六
蟬しぐれのなかを	三七
紅葉のなかを	五二

II

書齋の周辺

鴨と蹲踞	五五
すだちの秋	六六
唐招提寺の月	七二
蕎麦汁の味	七三

水	七六
---	----

梅の花と里子	七九
--------	----

山桜の頃	八三
------	----

春日遅遅	八四
------	----

焼き捨てた原稿	八七
---------	----

よしなしごと	九〇
--------	----

続よしなしごと	九三
---------	----

週言

紫式部	九六
-----	----

返事の強要	九八
-------	----

春の味	一〇〇
-----	-----

竹藪とバツハ	一〇三
--------	-----

小さな店	一〇四
------	-----

梅雨期の花と魚	一〇六
---------	-----

III

奇遇	一〇九
秋の香り	一一一
木犀と火鉢	一二三
鎌倉の交通渋滞	一二五
寒梅	一二七
上鶴が来た朝	一二〇
夢幻のなか	一二二
香のこと	一二三
精神の贅沢について	一二六
湘南の魚	一二八
魚のことなど	一三一
十五匹の車海老	一三四

IV

頑固な長老	一三九
藤枝長老の盃と印綬	一四二
落款と陶器と酒	一四三
大磯の家	一四九
ブランドーとフランスパン	一五一
さびしいコップ	一五三
無事の人	一五五
死を垣間みるということ	一六一
小説を書きだすまで	一六四
短歌と私	一六五
思いだす歌など	一六六
細谷川	一六九

世阿弥と道元	一七二
夏の本	一七三
劇の浄化作用	一七四
『きぬた』限定版跋	一七五
わたしの里子 読者の里子	一七六
『幼年時代』を書くまで	一八〇
『冬のかたみに』跋	一八三
*	
絵画の無限空間について	一八五
限定と拡散	一八八
*	
太古の風景	二〇三
大岡昇平著『現代小説作法』解説	二一〇
唐木順三著『光陰』	二一五

文芸時評（昭和四十九年七月号）

十二月号）……………二二七

V

視点

中国の古代青銅器	二六一
木犀	二六三
必要悪	二六三
伊那の宿	二六四
文学賞の選考委員	二六五
慈善事業	二六六
郷ひろみの暴力団	二六七
ある茶会と小面	二六八
蕎麦屋で	二六九

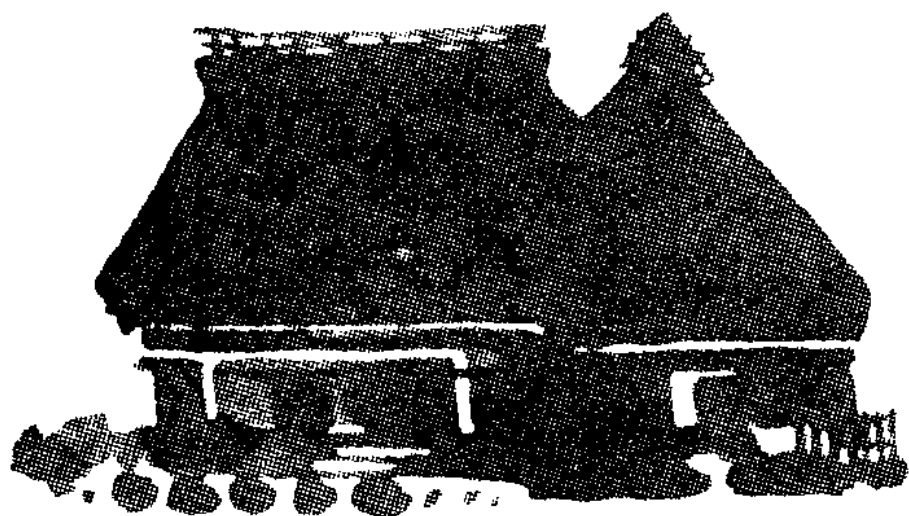
千登三子さんの本	二七〇
美術商の店先で	二七一
アクロポリスと結城紬	二七二
まかり通る犬の論理	二七五
心に節度を	二七九

裏方について	二八三
顔を見せること	二八六
*	
著者へ27問	二八九
あとがき	二九二

解説 竹盛天雄

夢 幻 の な か

I



わが風景の構図

春の雪のなかを

ながい北陸トンネルをぬけたら、春の雪がふっていた。田園も民家の屋根も山も、うつすらと湿った春の雪で濡れており、遠い山はすべて雪山だった。このとき私の裡うちに浮んできたのは、

山なみ遠とほに春はきて

こぶしの花は天上に

雲はかなたにかへれども

かへるべしらに越ゆる路みち

とうたった三好達治の三国みくにでの生活だった。もちろん、いろいろな人が書きのこしたもののから三好達治の三国での生活を知ったわけであったが、ある女性との一年にみたない生活で、この純

粹な詩魂がどれほど傷ついたか、私は車窓ごしの春の雪に、一詩人の北陸での生活を現実に見る思いがした。

私が越前^{えちぜん}に出かけたのは二月の末だった。肝臓と胆嚢^{たんのう}が以前よりわるくなってきたので、ことは予定いがいの仕事はすべてことわり、人にも会わず、山にこもっているつもりだったのに、越前の蟹^{かに}はどうですか、とよびかけられ、これは味わっておかねばなるまい、ということ、すこし無理をしたのであった。『夢は枯野を』という作品の下準備をしていた数年前の冬、東福寺の庭をみるために小田原から新幹線の列車にのつたら、開高健氏がのっており、大兄はどこに行かれるや、と大声できかれたことがあった。して開高氏はいずこに、と私が小声できいたら、越前に蟹を食べに行くという話で、彼はそのとき、海からあがったばかりの蟹を茹^ゆであげて食べるおいしさを、実に数百言を費して縷^る縷^ると語ってくれたのであった。それくらい越前蟹は私のなかで幻の蟹になったのである。金沢、鳥取、松江でも蟹は食べているが、私の味覚遍歴から越前の蟹だけはぬけていた。

いつもは独り旅なのに、こんどは編集子にまかせきりだった。三国町のへ川喜^きの大森杏雨氏に案内されて港の市場をみに行ったが、海が時化^{しけ}で漁船がはやく戻り、私達がついたときには競^せりが済んで市場が掃除されているところだった。仕方なく町の魚屋にでかけ、蟹を茹^ゆでているところを見物した。

歇^やんでいた雪が、こんどは霰^{あられ}になり、横なぐりの海風に乗って霰が頬を打つなかを、あれは問屋^{とみえ}というのだろうか、魚を選別している店に行つた。時化のため魚があがらなかつたとみえ、笹^{ささ}鰈^{がれい}、真鰈、雀鰈、比目魚、鮫^{あじ}鰈^{こう}などが土間においてあり、数人の男女がそれを大きき別に選^えりわけていた。蟹は足だけをガス釜^{がま}で茹でていた。貧弱な蟹で、開高氏の数百言は嘘^{うそ}だつたのか、と思つていたら、大森氏が、これは脱皮して目方が軽くなつた水蟹だと説明してくれた。

霰はいつしか霰^{みぞれ}になり、往時は遊廓^{ゆうかく}だつたという町並を歩いていたら、小さな魚屋の店先で若い夫婦が薪で蟹を茹でていた。薪とはまた古風な、と私はしばらく店先にたつて薪の火を視つめた。かつて三好達治はこんな小さな魚屋にきて茹であがる蟹を待ち、それをもとめて帰つたという。大森氏のこの話が私には氣持よかつた。三国時代の達治の詩が、まるで三国の冬の海のように物寂しく胸に迫つてきたことがあつたのを、私はいまも記憶にとどめている。傷ついた純粹な詩魂が、蟹を肴^{さかな}に酒を酌^くむことでいくらかは癒^いされていたのだろうか。

げにこそその日のかかる夜も

時雨^{しぐれ}の宿のつれづれに

冬ちかき海の遠音にまじらひて

また別の詩に、

波浪突堤を没し

飛沫^{ひまつ}しきりに白く揚れども

四辺に人語を聞かず